

M・スミス著

『ビルマ——反乱と民族の
政治問題——』Martin Smith, *Burma: Insurgency and the
Politics of Ethnicity*, London: Zed Books,
1991, xviii + 492 pp.

根 本 敬

I

本書はビルマ^(注1)の民族問題について、その全体像を詳細にまとめあげた、一イギリス人ジャーナリストによる労作である。民族問題とともにビルマの政治を混迷させてきたビルマ共産党（以下、共産党）の武装闘争についても、同党に対する少数民族側の対応を含めて細かく記述している。歴史的背景の解明を中心に現状分析と将来の展望を描いた、ビルマ政治史に関する画期的な本であると言える。

膨大な文献資料と、現地でのフィールド・ワークが全体の記述を支えている。著者は1982年から90年にかけて行なったフィールド・ワークにおいて、主に反乱側に身を置いた人々からの聞き取り調査を実施し、そこから得た情報を活かして、本書をおよそひとりのジャーナリストによる仕事とは思えないほどの質と量を兼ね備えた中身の濃いものにしている。

ビルマの民族問題（いわゆる少数民族問題）や共産党の動向に関する考察は、今までにも数多く書かれてきた。だが、評者の知る限り、本書はそれらの中で最も緻密に全体像を描いた秀作であると言える。ビルマをフィールドにする政治学者や歴史学者、また人類学者や地域研究者にとって、第一級の二次資料として価値を有すると同時に、時間さえ厭わなければ一般読者にも十分読むことのできる本である。

ビルマにおける民族問題は、1988年にビルマ全土を覆いつくした反体制・民主化運動と、その後の軍事政権による全権掌握がもたらしたさまざまな被害が報道

されるのと並行して、ここ数年あらためて世界の注目を浴びている。

国内では1990年5月、30年ぶりに複数政党制に基づく総選挙が実施され、自宅軟禁中のアウン・サン・スー・チーが書記長を務める国民民主連盟 (NLD) が議席の8割を獲得して圧勝したが、このとき NLD はビルマ国内に住む諸民族の権利の保障と、連邦制のあり方の再検討を最優先公約のひとつとして訴えた。そこには非ビルマ系諸民族（少数民族）の政治的・経済的・文化的状況の根本的改善なくしてビルマの安定はありえず、彼らとの連帯なくしては「民主主義」も「人権」もビルマで根づくことは考えられないとするアウン・サン・スー・チーの思想が反映されていた。全人口の3分の1を占める少数民族側も、この総選挙においてさまざまな独自政党を結成し、武装勢力とは一線を画す形で自らの声を中央に反映させるべく運動を展開して66名の当選者を出している。これは392名の当選者を出した第一党 NLD に次ぐ勢力である。

周知のごとく、軍事政権側は今日に至るまでこの選挙の結果を無視し、政権委譲に応じていない。彼らは民族問題については純粹に「治安問題」として認識し、カレン (Karen) やモン (Mon) などの少数民族の武装勢力に対する掃討作戦を強化する一方、辺境地帯に経済開発計画を持ち込んで一部の少数民族勢力の切り崩しを試みている（たとえばワ〔Wa〕やコーカン〔Kokang〕といった民族に対して）。こうした姿勢は NLD のそれとはまったく正反対のものである。

20を優に越える少数民族解放勢力が国内で中央政府との戦いを続けているビルマの今後の政治的安定を考えるにあたって、本書は正確かつ具体的な関連情報を提供してくれるばかりでなく、これからの展望も示唆してくれる。ビルマの近・現代史研究、および動向分析を行なう者にとって、確実に必読書のひとつにリストアップされる本になるだろう。

II

本書は以下に示す4部20章から構成されている。

第1部 対立の根源

第1章 ビルマ型停滞と1988年の危機

- 第2章 ビルマに住む人々——その歴史的・民族的背景——
- 第3章 「意味なき秩序」——英支配と民族解放運動の勃興——
- 第4章 大戦と独立 1942～48年
- 第5章 生き方としての反乱
- 第2部 議会制時代の反乱
- 第6章 「権力の最終的奪取」——地下活動の場と化す国——
- 第7章 失敗・縮小、そして連合戦線——1948～52年の共産主義運動——
- 第8章 コートゥーレイの戦い——少数民族蜂起の広がり——
- 第9章 ビルマ共産党の「修正主義」と1955年路線——平和への展望——
- 第10章 議会制民主主義の崩壊——ネィ・ウィンによる権力奪取——
- 第3部 ネィ・ウィン時代の反乱
- 第11章 軍政と和平交渉
- 第12章 文化大革命
- 第13章 北東軍管区と「四断作戦」
- 第14章 ウー・ヌの議会民主党の失敗、カレン民族の統一と民族民主戦線の結成
- 第15章 北部における戦争、アヘン問題と1980年1月の和平交渉
- 第16章 ナショナリティーをめぐる問題
- 第4部 1980年代——激変の10年——
- 第17章 民主化運動とビルマ共産党
- 第18章 1989年ビルマ共産党への反旗——路線の終焉？——
- 第19章 戦いは続く——民族民主戦線 (NDF) とカレン民族同盟 (KNU)——
- 第20章 新しい対立の時代？ 1990年総選挙とビルマ民主連合 (DAB)

構成を見てすぐに想像がつくように、著者は民族問題と共産党問題の歴史的経緯の究明に相当なエネルギーを割いている。

第1部の最初において1988年の民主化運動という「現在」から議論を始めているのは、分厚い本に読者

を惹きつけるためのジャーナリストらしい手法と言えるが、そのあとは19世紀の英領化以前のビルマにおける諸民族の状況から解き明かしが始まってゆく。初期の植民地当局のセンサスに見られる民族分類の杜撰さを具体例をあげて指摘している点などは大変に興味深い。

続いて英領時代における変容、ナショナリズムの高揚、日本占領期がもたらした変化、独立交渉期の共産党や各民族（とりわけカレン）の姿勢、アウン・サン将軍暗殺事件などを、インド省 (India Office) の公文書などイギリス側の一次資料とその他適切な英文二次資料を用いて詳細に描いている。この部分だけでも十分にビルマ・ナショナリズム形成史の概説として通用する。

第4章の後半、独立交渉期の記述においては、ビルマ民族（ミャンマー）の代表アウン・サン（AFPFL 議長）が主要少数民族代表者と話し合って連邦国家ビルマを形成するための基本合意をしたパンロン会議（1947年2月）に関して触れている。そこでは同会議の決議がビルマ側（AFPFL 側）だけでなくイギリス側によっても拡大解釈されたために、ビルマ民族と連邦を組むことに抵抗したカレン民族の声が最終的に葬られてしまった経緯が記されている。さらに、その後つくられた1947年憲法（連邦国家ビルマのあり方を規定した独立ビルマ最初の憲法）の中に、当時は見過ごされた欠陥があったことも指摘されている。いずれも専門家には知られている事実とはいえ、この2点の指摘は、ビルマ現代史の悲劇の根本がどこにあったのかをあらためて熟考させるものとして重要である。

第2部では、独立後のウー・ヌ政府に対して最初に反乱を起こした共産党の動きに始まって、すぐに続いたカレン民族防衛機構 (KNDO) を主体とするカレン民族の蜂起、そして1950年代以降反乱が他の非ビルマ系諸民族へ波及してゆく過程、さらに共産党の路線問題、最後に62年のネィ・ウィンによる軍事クーデターと議会制民主主義体制の終焉（ウー・ヌ体制の崩壊）までが語られる。

共産党蜂起を制圧するために最初活躍したのが当時ビルマ国軍の中心を担っていたカレン人部隊だったという皮肉、そしてそのカレン人将兵がその後 KNDO

の蜂起に呼応して反乱側に合流してしまうと、逆にそれによって国軍のビルマ化が急速になし遂げられ、ネィ・ウィンの台頭をもたらしたという経緯——これらもよく知られている事実とはいえ、細かな資料に基づいて書かれた本書の記述をあらためて読むと、独立を急いだことのつけとアウン・サンを暗殺で失ったことの損失が、止めようのない奔流となってビルマ現代史に流れ込んできた実態が理解できる。

また、少数民族側においても相互の連帯が必ずしもうまくゆかず、共産党との連帯をめぐる割れるなど、複雑な様相を示したことが明らかにされており、問題がビルマ政府対非ビルマ系諸民族の武装勢力、およびビルマ政府対共産党といった単純な構図の並立だけではないことがよく理解できるように記述されている（そしてこの状況はその後ずっと続く）。

第3部では、ネィ・ウィン体制下（1962～88年）における反乱の状況が80年1月までに限定して描かれている。

議会制民主主義を否定する形で登場した国軍主導のビルマ式社会主義体制は、当初、少数民族と共産党の反乱問題の解決への糸口を相互の和平交渉に求めようとした。しかし成果がほとんど得られないと見るや、一転して反乱の問題を純粋な治安問題と解釈し、武力解決に全力を注いでゆく。

共産党の方はその後、中国の文化大革命の影響を受けて内部闘争に陥り、リーダーのタキン・タン・トゥンを失う。また、終始少数派であった赤旗共産党は、国軍の攻撃を受け続けるなか、タキン・ソウ議長の逮捕によって勢力を大幅に弱体化させる。だが共産党の主流はシャン州北東部に移動してアヘンに頼る山岳民族の生活領域に新しい根拠地を築く。そして中国共産党から財政・軍事支援を受けながら「解放区」の強化と拡大を進める。結局国軍はそれを打破できないまま、両者にらみ合いの状況に持ち込むのが精一杯となる。

一方、カレンやカチン（Kachin）などの少数民族勢力の方は、1960年代後半から国軍による悪名高い「四断作戦」（ピャツ・レイ・ピャツ）が推し進められたため、武装勢力の食料、資金、情報および新兵補充の4つを断つと称して村落を激しく攻撃され、大きな被害を出す。しかし彼らは抵抗の気運を強め、1976年

には民族民主戦線（NDF）を結成してカレン民族同盟（KNU）とカチン独立機構（KIO）を中心とした非ビルマ系諸民族の連帯を強化しようと試みる。また連邦からの分離・独立という従来の主張を改め、「完全連邦制」（各民族の完全自治）の実現に目標を変更する。

このほか、南部のタイ国境では、1960年代後半からウー・ヌ派による議会民主党の結成と蜂起が始まり、アメリカCIAがそれを支援するという図式ができあがる。ただこれは少数民族側との連帯に失敗し、1970年代に入って崩壊する。

著者はこのようなさまざまな動きを示したネィ・ウィン時代の国内反乱状況を、常時その全体像が明確になるよう、反乱側関係者の聞き取り調査を存分に活用しながら整理している。

最後の第4部では、1980年代以降の動向と今後の展望が語られており、本書の最も価値ある部分となっている。とりわけ民主化運動と共産党・少数民族問題との相互連関に関する分析、および1990年代の展望については、フィールド調査に基づいた詳細な記述がなされ、ほとんど知られていなかった経緯が次々と明らかにされてゆく。

首都ラングーンをはじめビルマの平野部各地で激しい民主化要求運動（＝反ネィ・ウィン闘争）が繰り広げられていた1988年の7～8月、カレン側とモン側の武装勢力はタイ国境の三仏峠（スリーパゴダ・パス）で相互の勢力範囲をめぐる武力衝突を起こし、少数民族側が民主化運動と積極的に合流する大切なチャンスを逸してしまう。著者はこの事実を重視し、あらためてビルマの民族問題がビルマ民族（もしくは中央政府）対非ビルマ民族（もしくは少数民族武装勢力）という単純な構図でなく、非ビルマ民族（武装勢力）同士の不和をも含んでいることを指摘する。

1989年に入ると、シャン州北東部の共産党の根拠地で反乱が起こり、それまで同党の将兵として動員されてきた山岳民族のワヤコーカンが、同党指導部を中国側に追い出し、共産党を事実上壊滅状態に追い込む。アヘンの製造・販売をめぐる利権のからんだこの興味深い経緯の記述を通じて、少数民族側から見た共産党が、結局は「ビルマ民族のもうひとつの顔」にすぎなかったことが示される。また、ワもコーカンもその後

辺境の開発計画を持ちかけてきた軍事政権との和平に応じてビルマ軍の民兵となった事実を記すことによって、ここでも少数民族側がけっして一枚岩ではなく、さまざまな自民族中心の「論理」を内包していることが示唆されている。

一方、軍事政権の登場で、逮捕・弾圧を恐れた平野部のビルマ民族の学生たちが大挙して国境地帯に入り込むと、カレンとカチンを核とする NDF は、彼ら学生がつくった全ビルマ学生民主戦線 (ABSDF) と組んで、あらたにビルマ民主連合 (DAB) を結成する。NDF にとっては、1976 年以来「連邦からの分離・独立」ではなくビルマ民族も加えた「完全連邦制」の主張を訴え続けてきた手前、ビルマ人青年たちの合流は建前上拒否できなかった。しかし著者は、両者の関係がけっして平等にはゆかず、KNU の発言力が相当に強いこと、また KNU と KIO との関係がしっくりいっていないことなどを指摘し、失望した学生の一部がタイ側に出て行ってしまったりビルマ側に戻ったりしたことにも触れている。

国境の学生たちの戦いは、マラリヤによる被害などが知られているが、彼らにとって初めての少数民族との出会い、それも数十年にわたり「ラングーン政府」と戦い続け解放区を維持してきた人々との出会いは、新しい政治的展望をもたらすきっかけとなったと同時に、ある種の失望をも生んだようである。

III

しかし、著者は最後に楽観的な展望をもって本書を締めくくっている。国境に入り込んだ ABSDF の学生たちの声を引用しながら、純粋に民主主義を求め、自ら危険な国境のジャングルに入って非ビルマ系諸民族の解放勢力と出会い、彼らと共闘しながら将来の民主的ビルマを夢見るビルマの青年たちに、この国の未来が託されているのだと断言するのである (第20章)。

この結論には評者も賛成である。ただ、道のりが平坦ではないことだけは確かであろう。著者が明示してきたさまざまな問題に関して、単に平野部のビルマ人青年たちと国境の少数民族が劇的に出会ったからといって、それだけで事が解決に向かうとは思われない

からである。両者の出会いはひとつの大きな「きっかけ」にすぎず、今後のビルマの民族問題の解決と民主化の進展は、両者の政治的成熟にかかっていると言えよう。反乱が少数民族の「生き方」と化していると指摘する著者に従えば、ビルマは第二のボスニアにもなりかねない要素をはらんでいる。国境での「出会い」が、ビルマに住む諸民族にとって、そうした愚かな対峙に向かわないための成熟への一里塚であることを、評者はもちろんのこと、おそらく著者自身も願っているのではないだろうか。

ところで、本書はビルマの民族問題と共産党問題の事典としても活用できる。すべての解放勢力の略称一覧が載っているため、すぐに正式名称を調べられるし、よくできた「索引」からの逆引きで、容易に特定の民族やその解放勢力の歴史などを調べることができる。

実際に評者は、1991 年末から 92 年にかけて世界をにぎわせた「ロヒンジャー問題」^(注2)が発生した際、多くのマスコミが彼らについてあいまいな記述をしているなかで、本書 241 ページの記述によつて的確な知識を与えられ、感謝したことがある。これは著者がビルマの諸民族とその解放勢力について網羅的に記述しているからこそ可能なのであって、こうした全体像を描いた本の登場は、ビルマ史研究者にとってきわめてありがたいことである。

最後に、書評である以上、本書の難点をあげておく必要もあろう。とりたてて大きな難点は見当たらない著書だが、あえていくつか指摘するとすれば、次の 3 点である。

- (1) 膨大な注によって出典は明らかにされているものの、ビブリオグラフィー (参考文献・資料一覧) がないため、研究者から見た場合、不便を感じる。著者は「まえがき」で本が分厚くなりすぎるのでビブリオを省略した旨ことわっているが、やはり出版社を説得してでもつけるべきではなかったか。
- (2) ジャーナリストによる著書で、かつフィールド・ワークの賜物であるにもかかわらず、表紙を除いて写真が一枚もないのは残念である。本書のようなテーマの場合、写真による理解の助けは大きなものがあろう。これも本をこれ以上分厚くしな

いための「配慮」だったのだろうか。

- (3) 全体像を描いた以上、是非「年表」もつけてほしかった。本書は広い意味での歴史書としての性格を有するのであるから、そうした工夫はあってしかるべきだったろう。

日本人のジャーナリストも少なくない数がビルマの少数民族問題に関心を持って現地に入っているが、カレンやカチン、学生状況、および「黄金の三角地帯」などに限定した報告は見られるものの、本書のような全体像を描く著作は今のところ見当たらない。著者のように徹底的にこの問題にこだわって、日本語でビルマが抱える民族問題の詳細な本を書く人は現われ

ないものだろうか。

なお、1993年11月に本書のコンパクト版が同じ出版社から出版されたことを付記しておく。

(注1) 「ミャンマー」を使わないで「ビルマ」を使う理由については、拙稿「“ビルマ”か“ミャンマー”か」(『通信』〔東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所〕第73号 1991年11月)を参照のこと。

(注2) ビルマ西沿岸部のアラカン州に住むベンガル系イスラム教徒「(自称)ロヒンジャー」(Rohingya)が、ビルマの軍事政権による弾圧とアラカンの仏教徒による嫌がらせを逃れてバングラデシュへ大量に出た事件。1993年11月現在未解決。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手)